特集 日本研究の道しるべ——必読の一〇〇冊

映画 Film Studies

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ

キーワード：アメリカによる占領、アニメ、アヴァンギャルド、シネマ、デジタルドキュメンタリー、メディアミックス、モダニティ、多文化主義、ネイション、セックス、観客性、スターダム、トランスナショナル

はじめに

日本映画研究のための必読書を五～十点に絞るのは至難の業だ。たとえその数を倍に増やしたとしても、作業が容易になるわけではない。ましてや執筆言語を日本語だけでなく他の言語にまで広げるとなると話はさらに難しくなる。当然ある種の戦略が必要となる。そこで、今回私は「英語で書かれた」という条件に絞り、「日本映画研究のための必読書」リストを上納しようと思う。おそらく日本語を母語とする多くの読者にとって、日本語書籍の中から「必読書」を選び出すことは容易であろう。デジタル技術隆盛のご時世、どこかの図書館のサイトに入り、キーワード検索さえすれば、かなりの数の書籍名が自動的にリストアップされる。それならば、むしろ日本語ではない言語（ここでは英語に限定する）で書かれた日本映画に関する「必読書」について考えてみたい。日本映画研究という領域が日本語文化圏の外でどのように築きあげられてきたのか——英文の「必読書」を再考することによって、その過程を見極めることを本稿の目的としたい。さらに、これら英文の「必読書」と日本語で書かれた映画研究書との相関性にも触れたい。二つの言語の間にどのような相互依存があったのか、あるいは競合のようなものが生じたのか、そういった点にも意識を広げたい。なお、字数に制限があるため、今回は英語・日本語書籍ともに論文集の紹介はしないことを予め断っておく。

1 *The Japanese Film: Art and Industry*
(Princeton University Press, 1959; revised 1983)

二〇一三年、ドナルド・リチー（Donald Richie, 1924–2013）がついに八十八歳で亡くなった。彼の日本映画研究への貢献は大きい。私事ではあるが、彼とは二度ほど言葉を交わしたことがある。一度目は一九九〇年代初頭、彼がニューヨーク大学で講演をしたとき、二度目はベニスの近くで毎年開かれるポルデノーネ・サイレント映画祭に参加したときだ。たしか二〇〇〇年代初頭だったと記憶している。リチーは流暢な日本語を話したが、読み書きはできなかったはずだ。つまり、*The Japanese Film* を出版するにあたっては、彼の共著者であったジョセフ・アンダーソン（Joseph L. Anderson）の助力が大きかったであろう。アンダーソンは今も健在なのだろうか。かつて著者が博士論文を単著のレベルへと修正する際には、彼から有益なコメントを幾つもいただいた。

リチーがアンダーソンと共に *The Japanese Film* を最初に上梓したのは一九五九年である。この仕事は、その後のリチーの数多くの著作の礎（いしずえ）になっただけでなく、日本映画史研究そのものにとってもなくてはならない一冊となった。例えば、拙著 ***Nippon Modern: Japanese Cinema of the 1920s and 1930s***（University of Hawai'i Press, 2008）を執筆の際、自分が分析しようとしている映画作品が歴史的にどのように認識されていたのか、そういった時代考証を確認するためにこの本を無視するわけにはいかなかった。さらに、些末な事象のようだが、彼らが丁寧に翻訳した日本映画の英語名は特に貴重だった。別の言い方をすれば、一九五九年以来、*The Japanese Film* が英語圏での日本映画研究の「規範」を形成したといっても過言ではない。

しかし、彼らの仕事がすべて独自のリサーチやアイデアから生み出されたわけではなかった。その先駆けとして、田中純一郎の大著『日本映画発達史』（第一巻「活動写真時代」、第二巻「無声からトーキーへ」、第三巻「戦後映画の解放」中央公論社、一九五七）が出版されている点は見逃せない。同年すでに日本に滞在していたリチーとアンダーソンは、確かに本書を手にすることができたはずだ。リチーは一九四七年に初来日し、四九年にいったん米国へ帰国するも、五四年には再来日している。『日本映画発達史』と *The Japanese Film* 両書の映画、映画製作者、あるいは映画産業に対するアプローチの近似性からも推察できるように、リチーとアンダーソンにはその執筆以前に、日本語の「青写真」があったというわけだ。

では、これら二つの映画史の大きな違いは何かといえば、リチーとアンダーソンが、田中が築き上げた産業史に上乗せする形で、映画テクストを芸術作品として見たことだった。つまり、実際に見た映画作品に批評家として対峙し、作品分析を細かく加えたのである。

まさにその副題 *Art and Industry* が示すとおり、映画の「芸術性」を映画史に加味した功績は大きいと言えるだろう。

実は北米で日本映画の授業を行う際、*The Japanese Film* を課題として学生に読ませることはほとんどない。それ以後に発表された書籍や論文の中から、各週のトピックにより適した読み物を選ぶことができるからだ。しかし、およそ半世紀前に書かれた本書を、わたしは学生たちに映画史の「参考資料」として読むことを勧める。隅から隅まで読む必要はないが、自分の興味のある部分を読んでごらんなさい、と。なぜならば、そこには、古き良き日本映画の最盛期に付着する活気や輝き、時代の情熱のようなものが包み込まれている気がするからだ。

2　*To the Distant Observer: Form and Meaning in the Japanese Cinema* (University of California Press, 1979; University of Michigan, Center for Japanese Studies Publications, 2004)

ノエル・バーチ（Noël Burch）のこの本は、長い間入手するのが難しかった。一九七〇年代末にカリフォルニア大学出版会から刊行されて以来、再版されることがなかったため、学生に購入させることもできなかった。仕方がないので、本文の一部をコピーしたり、スキャンしてメールで送ったりといった方法でやっと宿題にできたことを記憶している。しかし二〇〇四年以降、ミシガン大学出版会が版権を譲り受け、新たに歴史学者ハリー・ハルトゥニアンの「序文」を加えて、同書のデジタル版が出版されている。ＰＤＦのダウンロードも無料である。こういった形での再版は読者に歓迎されるのみならず、著者にとっても、自分の著作が読まれ継がれるわけだから喜ばしいに違いない。再版に関しては、以下のサイトを参照してほしい。https://www.press.umich.edu/9362450/to_the_distant_observer

バーチの学者に至るまでの道のりはやや紆余曲折している。一九三二年にサンフランシスコで生まれ、五一年にパリの高等映画学院で学ぶために渡仏した。以来、彼はずっとフランス住まいということになっているが、*To the Distant Observer* の出版前後（一九七二～八一年）には、ロンドン、ブリュッセル、ニューヨーク、オハイオの各大学で映画学の教鞭を執っている。一九七〇年代という、まだ映画学が「駆け出し」だった時代であり、規格化されない映画のクラスを、まさにバーチのようなシネフィルが担っていたというわけだ。パリに移り住んだ後のバーチは、音楽家ミシェル・ファノの助手や、フランスで撮影を行っていたプレストン・スタージェスのアシスタントを務めるほか、ヌーヴェルバーグの映画監督ピエール・カストやアンドレ・Ｓ・ラバルトらと一緒に映画製作にも携わっている。彼はもともと映画を分析するよりも製作することに興

味があったのだろう。

バーチが出版した英文学術書はこの本を含めて二冊だけだが、*To the Distant Observer* は、バーチの名を日本映画史学の中に刻みつけた。彼と日本との関係は実際にはとても薄いのだが、この本を書くにあたりバーチは短い期間日本を訪れている。その滞在中に彼は、できる限りの日本映画を、文字通りかき集めるようにして見た。しかし、彼が手にした日本映画に関する情報量は、一九七〇年代というアナログの時代状況を鑑みるに、今日とは比較にならないほど少なかったに違いない。そういった限られた知識の中から彼が作り上げた日本映画史は、ロラン・バルトによって紡ぎ上げられた、記号論を踏まえた日本論『表象の帝国』（仏語初版一九七〇；日本語版一九七四；英語版一九八三）から多大な影響を受けている。

To the Distant Observer の強みは、なんといっても記号学・反構造主義・マルクス主義といった理論や方法論を、日本研究という領域研究と結びつけた点である。長い間、領域研究には理論が不在だとされていた。しかし、再版に「序文」を加筆したハルトゥニアンも記しているように、バーチのバルトへの傾倒、ひいては記号学的アプローチの偏重は、むしろ彼が形作ろうとした日本映画史そのものを過度に歪曲し、西洋中心主義的な視点をその分析の中心に刻印してしまう。つまり、日本映画が、映画史における主流と反主流との転換を企てようとするバーチ自身の主張を補完するための「道具」におとしめられるという結果を招いてしまった。

しかし、ここで改めて強調しておきたいのは、そのような矛盾や欠如を抱えていながらもなお、本書が読み応えのある必読書に変わりはないという点だ。バーチの映画分析は「事実」との不整合性を抱えながらも、誤解を恐れず、自己の信じるマルクス主義的イデオロギーに取り組むかたちで書き上げられた力強さに溢（あふ）れている。さらに興味深いのが、一九七〇年代後半、まさに世界中を冷戦体制が席巻していた状況下で、バーチの「パリのアメリカ人」としての立ち位置を如実に感じさせる点だ。時代の政治的背景に強く抗う書き手の政治性そのものが、実のところ本書を著す動機となっていると言ってもよいだろう。*To the Distant Observer* は、単なる映画史を超え、それ自体が「歴史的なテクスト」として、我々に今も語りかけている。

3 ***Ozu and the Poetics of Cinema*** (Princeton University Press, 1988; University of Michigan, Center for Japanese Studies Publications, 2004)

デイヴィッド・ボードウェル（David Bordwell）は幾つもの刺激的な著書を出版し、一九八〇年代から四半世紀にわたり映画学を牽引

した研究者だ。例えば、彼の古典的ハリウッド映画に関する論考は、ハリウッド映画を研究する時だけではなく、映画そのものを研究する際の「規範」を作り上げた。しかし、その規範そのものが、いかに「植民地主義的」な考えの産物であり、アメリカ中心主義への疑いの無さだったかを、後年指摘されたことも付け加えておかなくてはならないだろう。

彼の認知理論に基づく映画へのアプローチ法や、新形式主義的な方法論など、その独自な思考と解釈は、著作が出版されるたびに論争の的となった。なかでも日本映画研究に欠かせない必読書が、*Ozu and the Poetics of Cinema* である。杉山昭夫が一九九二年（新装版二〇〇三）に青土社から翻訳版『小津安二郎 映画の詩学』を出版しており、日本の読者にも親しみ深い一冊となっている。

私自身は、形式主義的アプローチを採らない。しかし、本書から受けた影響は他のどの本からのものより大きかったかもしれない。形式（film form）と物語スタイル（narrative style）とを、どの角度から、どのように組み合わせることにより意味を見つけ出していくのか——まさに映画分析の妙味を学んだ。彼の著作の魅力は、その表現の明朗さとも関係している。専門用語ばかりになるのを避け、奇をてらわず、ニュアンスを仄（ほの）めかすのでもなく、自己の考えを常に明瞭に提示する。妻クリスティン・トンプソン（Kristin Thompson）との共著である、映画学の教科書 ***Film Art: An Introduction*** は、一九七九年に出版されて以来、二〇一六年にはウィスコンシン大学マディソン校のジェフ・スミス（Jeff Smith）を共著者に加え、第一一版まで増版され続けている（McGraw-Hill Education, 2016）。

Ozu and the Poetics of Cinema に話を戻そう。本書が一九八八年に出版される以前、すでにその前奏ともいえる小津安二郎映画の再考ブームが日本では起こっていた。一九八〇年代から世界各地で繰り返し開催されていた小津の回顧上映会もブームに拍車をかけた。それ以上に、八〇年代にはＶＨＳ（ホームビデオ）の普及に伴い、自分の好きな映画作品を何度も繰り返し見ることができるようになったことが大きい。こういった技術的な偶然にもわれわれは注意を払う必要があるだろう。

日本の出版界で小津安二郎ブームを牽引したのが、一九八三年に出版された蓮實重彦の『監督　小津安二郎』（筑摩書房：増補決定版、ちくま学芸文庫、二〇〇三）である。本書は未だに他の追随を許さない。蓮實は一九七五年から東京大学教養学部で映画論ゼミを開講しており、すでに知識層に一定の「読者」を開拓していただけでなく、責任編集した季刊映画誌『リュミエール』（全十四冊、一九八五—八八）も、読者層をいっそうひろげる結果となった。否定的で冷笑的な蓮實節は多くの読者を魅了し、特に映画研究を志す日本のシネフィル男性たちの心を鷲掴みにしてしまった。その独特の文体と、何が興味深くて何が面白くないかという「蓮實観」を踏襲した「小

型蓮實」たちが、その後しばらく、日本語映画言説の中心を占めるといった不思議なガラパゴス化現象が発生した。

ボードウェルは日本語を解さない。しかし彼は、蓮實の仕事を「読んでいる」。いや、蓮實だけでなく、彼は自分の持つありとあらゆる人材（man power）と資材を駆使することによって、一九八八年の *Ozu and the Poetics of Cinema* の出版に備え、小津映画に関する言説を可能な限り把握していた。蓮實が、「蓮實重彦」というシネフィルを中心に置き、その「見る主体」が小津映画におけるフィルム的感性をいかに享受し、それをいかに表現するかを映画分析の肝に据えているのに対し、ボードウェルは、小津映画の詩的な要素（poetics）を、古典的ハリウッド映画によって培われた規範／物差しとの比較によって明らかにしようとする。すなわち「感性」や「魅力」といった曖昧な価値を客観的に立証する方法論を採ろうとした。このように異なる方法論と目的を持つ二つの仕事が、一九八〇年代に「小津」の作品を経由する形で相次いで発表されたわけだが、その後、新しい形の作家論的アプローチが、溝口健二、黒澤明、成瀬巳喜男研究へと波及した点も、*Ozu and the Poetics of Cinema* のもう一つの功績と言えるだろう。

なお、本書も一九八八年以降は再版されていないが、二〇〇四年からミシガン大学の Center for Japanese Studies Publications にデジタル・ドキュメントとして掲載されている。以下のサイトを参照してほしい。https://quod.lib.umich.edu/c/cjs/0920054.0001.001/--ozu-and-the-poetics-of-cinema-david-bordwell.

4 *Currents in Japanese Cinema: Essays* (Kodansha International; distributed by Kodansha International/USA through Harper & Row, 1982) by Tadao Sato; translated by Gregory Barrett

佐藤忠男の本著作は、これまで紹介してきた「必読書」とはまた別の意味で選んだ。特に、この本が「必ず読まれるべき」とは思わない。しかし、「日本映画研究のための必読書」について考えるとき、佐藤忠男の仕事を無視するわけにはいかない。彼は多産の作家である。日本映画研究者が資料集めをする際、まず足を運ぶのが早稲田大学演劇博物館図書室だが、その蔵書検索機能で「著者名　佐藤忠男」を調べると、一二三件の著作がヒットする。それらのほとんどは日本語図書であり、英語に翻訳されているのは上記のタイトルを含め、わずか二冊だけである。フランス語など、その他の言語に翻訳されているものもあるが、その数は日本語の著書数にはとうてい及ばない。

佐藤の著書を一九八〇年代初頭に翻訳したグレゴリー・バレットは、その仕事の意義を正当に評価し、映画評論家としての佐藤を「市民の味方（the common man's ally）」と称している。佐藤は大学教

育を受けておらず、労働者階級に属する働き手としての自らの生い立ちを意識的に強調しながら、好きな映画についての考察を出版という形で次々と発表してきた。「市民の味方」というポジショニングは、単に国内における階級の問題だけに留まらず、国家的あるいは文化的アイデンティティのレベルにおいても大きな意味を見出した、と私は思う。

従来、日本映画に関する英文著書を出版してきたリチー、アンダーソン、ポール・シュレイダー、オーディー・ボック、バーチといった研究者らは、常に日本の伝統的な美学や概念――例えば、禅宗の教えや、茶道に語りつがれる「もののあわれ」など――を引き合いに、そういった思想や感性が日本映画の中に内在すると当然のように仮定していた。彼らにとって日本映画は、（彼らの）「慣習的方法とは異なる（alternative）」形式に基づいており、それを自明なことだとする議論が展開された。一方、佐藤のアプローチには、そういった幻想が介在しない。むしろ同時代のポピュラー文化や政治状況の中に映画を据え、直截的な社会コンテクストと擦り合わせながら映画を観ること、それが何よりも彼の仕事の「新しさ」であった。

Currents in Japanese Cinema は、その副題「*Essays*」が示すように佐藤の書きためたエッセイの集成であり、映画分析をするにあたっての一定の方法論が提示されているわけではない。また、一冊の書籍を刊行する際に練られなくてはならない戦略や目的といったものも見出すことはできない。非常に読み応えのある章もあれば、月並みなステレオタイプの羅列のような章もあり、内容に均等性を欠いている。にもかかわらず、本書は大きな意義を持つことをここで強調しておきたい。日本語を解することのできない、それでいて日本映画に興味を持ち始めた読者の多くが、文化的な本質主義（cultural essentialism）とは立場を異にする言説と初めて出合うことができた点である。

佐藤の著作の英語版をもう一冊紹介しておこう。二〇〇八年に出版された ***Kenji Mizoguchi and the Art of Japanese Cinema*** （Berg）だ。これは、一九八二年に筑摩書房から出版された『溝口健二の世界』を二十五年以上の月日の後に翻訳したものである。翻訳者のブリジ・タンカ（Brij Tankha）は近現代日本史をデリー大学で教えている歴史学者で、ニューデリーに本拠を置く映画雑誌 *Cinemaya*（現 *Osian's Cinemaya*）に翻訳記事を数多く掲載している。溝口健二の映画に関する本書については、編者（Latika Padgaonkar and Aruna Vasudev）によると、NETPAC-India が日本文化に関する翻訳をすることを条件に国際交流基金から助成を受けて完成した経緯があるらしい[1]。

二十五年以上という翻訳されるまでの長い期間とその出版経緯の偶然性からも察せられるとおり、たとえ日本映画に関する貴重な研究書といえども、そのような書物が英訳されることの希少さを伺い

知ることができる。映画学、特に日本映画研究というディシプリンが、英語圏ではそれほどたくさんの人口を抱えていないせいかもしれない。日本映画そのものが一九九七年に起こった「日本映画のルネッサンス」以来、アニメーション以外にこれといった大きな人気作を輩出していないせいもあろう。また、日本そのものが新社会主義のあおりでめざましい発展を続ける中国の陰になり、世界からの主要国として注目を得られていないせいか。理由の種はつきない。しかし、一つ明らかなことは、日本語、英語、この二つの文化圏の間での日本映画を媒介とする「対話」は、*Currents in Japanese Cinema: Essays* が一九八二年に出版された時点からそれほど劇的に変化したとはいまだ言いがたい点である。

そのような意味で、逆翻訳の形ではあるが、リピット水田堯（Akira Mizuta Lippit）の『原子の光（影の光学）』（門林岳史＋明知隼二訳、月曜社、二〇一三；原著 ***Atomic Light (Shadow Optics)***, University of Minnesota Press, 2005）や、マーク・スタインバーグ（Marc Steinberg）の『なぜ日本は〈メディアミックスする国〉なのか』（大塚英志監修、中川譲訳、KADOKAWA、二〇一五年）といった本を日本語で読むことができるようになったことには、書籍の内容とは異なるレベルで意義があると思う。翻訳という作業は、誰もが認めることだが複雑で時間がかかる。例えば、後者のタイトルを私はある種の驚きをもってながめた。なぜならば、そのタイトルは「日本」という国家を一枚岩的な主語とし、それがあたかも「メディアミックスをする」という行為を行う主体のように表現しているからだ。その表現のニュアンスの中に佐藤忠男以前の米国映画研究者たちが暗に共有していた文化的な本質主義を感じた。スタインバーグの原著 ***Anime's Media Mix: Franchising Toys and Characters in Japan*** （University of Minnesota Press, 2012）には、そのような発想を感じる部分はなかった。出版という経済効率と直結する「地政学の場」においては、こういった誤謬や必要悪も生まれるのかもしれない。

5 *The Anime Machine: A Media Theory of Animation*
（University of Minnesota Press, 2009）

北米で最も権威ある映画・映像学会と目される The Society of Cinema Studies（ＳＣＳ）が、映画研究の枠組みを拡大し、視覚メディア一般に関する研究業績を正式に受け入れることに決め、その学会名を The Society of Cinema and Media Studies へ変えたのは二〇〇二年だった。ＳＣＳの前身である The Society of Cinematologists が創設されたのが一九五九年、それが上記のＳＣＳへと規模を拡大し、改名したのが六九年だった。半世紀を経過した後、この学会は現在五百以上の高等教育機関、そして四十カ国に及ぶ国から集まった三千人

を超える研究者の参加によって成り立っている（二〇一五年におけるデータ）。映画学そのものが、シネマというプラットフォームの枠組みを越えてから久しい。一つの精巧なデータとして大小取り混ぜた複数のスクリーンへと流れ込む「映画」という存在は、今までの製作・配給・受容形態の構造だけでは分析することができなくなった。また、一九九〇年代以後のデジタル化は、「映画」と呼称されているテクストのとらえどころのなさに拍車をかけた。こういった技術的な発展に伴う「映画」というメディアの変遷に対して、意識的に取り組もうとする「必読書」を幾つか紹介することで本稿を締めくくりたい。

トーマス・ラマー（Thomas Lamarre）の *The Anime Machine* は、日本のアニメーションに対する今までの方法論とは決定的に異なるアプローチから、「アニメ」について述べている。ラマーの主眼は、日本のアニメーションを社会における経済的な必要性や価値観といったものから分析するのではなく、あくまでも技術的な必要性やその価値観に則した形で分析する点にある。彼は、フランスの思想家ポール・ヴィリリオが提唱した概念「シネマティズム」（cinematism）を、「アニメティズム」（animetism）という新たな概念と対比させる形で論旨を展開している。

「シネマティズム」はシネマという装置を指すだけではなく、例えば列車の車窓から見える風景や、車のフロントガラスを通して見える風景、あるいはテレビの画面といった、あらゆる「動く映像」によって喚起される知覚に内在する要因として定義される。ラマーはヴィリリオの論理を忠実に解釈し、「シネマティズム」の説明を企てている。すなわち、「シネマティズム」は二つの重要な機能を果たしているのだ、と。まず一つめは、見る主体に対して、世界そのものを注意深く監視し、それをコントロールすることができるという意識を与える役割、そしてもう一つは、実際にはその見る主体と見られる対象との距離を崩壊させるという役割である。デカルト的な合理性と科学技術論に内在する合理性に基づくヴィリリオの概念「シネマティズム」を一つの尺度としながら、ラマーは日本のアニメーションを精査し、そこに見出すことのできる異なる効果を「アニメティズム」と呼ぶ。「アニメティズム」は、単にそこにある画像を異なる方法で認知するだけではなく、こういった技術について異なる考え方を想起させたり、あるいはそういった状況に存在するための異なる方法を提示する。彼は「アニメティズム」の特徴を、一つのイメージを複数の平面へ分化することであり、その結果として多数の平面を合わせたイメージとして現れるものである、と結論づけている。本書を読みながら、ある種の解放感を感じた。アニメについて語る時、あるいは日本の映画について語る時、それらのメディアを形成する技術を主眼に思考を展開することによって、ここで分析の対象となっている数々のテクストは、いったんは押し込め

られてしまった「日本」という冠による境界を今一度越境する可能性を与えられた気がしたからだ。

「映画」を「メディア」という広角な枠組みに置き直すことによって、新たに見えてくるものがあるはずだ。本稿の冒頭で、論文集には言及しないと断り書きを添えたが、ある種こういった希望をもって編纂された新しい論文集を例外的に最後に紹介したい。マーク・スタインバーグとアレックス・ザルテン（Alexander Zahlten）共編著の***Media Theory in Japan***（Duke University Press, 2017）である。多くの論文集にありがちな問題点、例えば、全体的なまとまりや方向性を欠いている点は否めず、そこに収録されている多数の論文のうちどれだけが真摯にメディア「theory／理論」と取り組んでいるかは、読者諸氏の判断に任せたい。しかし、私は通読した瞬間、ああ、これからの日本映画の分析をする時、こういった雑駁（ざっぱく）（unsystematic）な知識を把握する方法論がむしろ決定的に求められることになるのだろうなあと感じた。そのような予兆を与えてくれる一冊である。

注

（1）NETPAC-Indiaとは、ニューデリーを中心に活動するノンプロフィットの独立法人であり、アジア映画、特にインド映画に関する情報を発信したり、実際にこれらの映画作品に人々の関心を向けるといった活動をしている。

その他のおすすめリスト20（本文で扱った五冊以外。論文集は除外する。）

Cozdyn, Eric M. *The Flash of Capital: Film and Geopolitics in Japan*. Durham: Duke University Press, 2002.

Desser, David. *Eros Plus Massacre: An Introduction to the Japanese New Wave Cinema*. Bloomington: Indiana University Press, 1988.

Fujiki, Hideaki. *Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 2013.

Furuhata, Yuriko. *Cinema of Actuality: Japanese Avant-Garde Filmmaking in the Season of Image Politics*. Durham: Duke University Press, 2013.

Gerow, Aaron Andrew. *Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895–1925*. Berkeley: University of California Press, 2010.

Hirano, Kyoko. *Mr. Smith Goes to Tōkyo: The Japanese Cinema under the American Occupation, 1945–1952*. Washington, D.C.: Smithsonian Institute, 1992.

Kirihara, Donald. *Patterns of Time: Mizoguchi and the 1930s*. Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1992.

Kitamura, Hiroshi. *Screening Enlightenment: Hollywood and the Cultural Reconstruction of Defeated Japan*. Ithaca: Cornell University Press, 2010.

Ko, Mika. *Japanese Cinema and Otherness: Nationalism, Multiculturalism and the Problem of Japaneseness*. London and New York: Routledge, 2010.

Miyao, Daisuke. *Sessue Hayakawa: Silent Cinema and Transnational Stardom*. Durham: Duke University Press, 2007.

Napier, Susan Jolliffe. *Anime from* Akira *to* Howl's Moving Castle: *Experiencing Contemporary Japanese Animation*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.

Nornes, Markus. *Forest of Pressure: Ogawa Shinsuke and Postwar Japanese Documentary*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2007.

Russell, Catherine. *The Cinema of Naruse Mikio: Women and Japanese Modernity*. Durham: Duke University Press, 2008.

Sharp, Jasper. *Behind the Pink Curtain: The Complete History of Japanese Sex Cinema*. Godalming, Surrey: FAB, 2008.

Standish, Isolde. *A New History of Japanese Cinema: A Century of Narrative Film*. New York: Continuum, 2005.

Steinberg, Marc. *Anime's Media Mix: Franchising Toys and Characters in Japan*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012.

Turim, Maureen Cheryn. *The Films of Nagisa Oshina: Images of a Japanese Iconoclast*. Berkeley, Calif.: University of California Press, 1998.

Wada-Marciano, Mitsuyo. *Japanese Cinema in the Digital Age*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2012.

———. *Nippon Modern: Japanese Cinema of the 1920s and 1930s*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.

Yoshimoto, Mitsuhiro. *Kurosawa: Film Studies and Japanese Cinema*. Durham: Duke University Press, 2000.